

## ありがとう、梅雨、ありがとう、ヒマラヤ

OWCC 中川和道 20190709

梅雨という表題に顔をしかめる仲間も多かろう。ところが、梅雨があるから紫外線の害が減る。登山とからめて、今回は、その話をしよう。大学で教えていた紫外線環境科学の関連だ。

地球の自転軸は黄道面垂直軸から 23.5 度傾いているから、太陽からの日射を受け止める地面の角度が公転周期 1 年の間に変わり、中緯度地帯には春夏秋冬の四季ができる。日本が太陽に最も正対するのが夏至 6/22 の前後だ。この時期に日射が最も強くなり、紫外線も最も強くなる。最も強い紫外線をさえぎるには最も厚い長袖を着込みたいところだが、紫外線が強い時期はまさしく暑くて半袖そのものの季節。希望と現実との大きなギャップにうんざりさせられる。

私たちの皮膚は表皮の 0.07mm 奥に皮膚細胞の再生工場（「基底細胞層」）がある。皮膚再生の設計図 DNA が紫外線にやられて壊れるのが皮膚ガンの一原因だ。私たち日本人がもつ黄色系の色素は、紫外線をしゃへいして皮膚ガンの発症を減らす。オーストラリアに植民地を築いた白色系の人々の皮膚は、色素がもともと少ないから色白で、したがって、紫外線に弱い。オーストラリアでは皮膚ガンの発症が多く、これがオゾン層破壊防止運動の原点となった。皮膚ガンの発症が多い理由は、紫外線に弱い人たちだということだけではない。梅雨がないことも、実は大きな原因だ。日本の紫外線被ばく量を月別に調べた結果が下図[文献 1]である。梅雨の時期 6、7 月にはグラフの縦軸の値がもっと跳ね上がるべきところだ

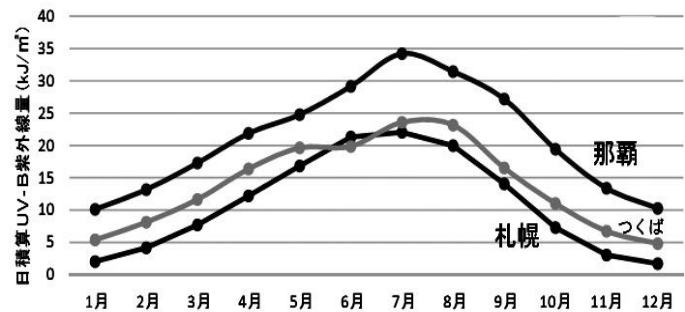
が、梅雨空をおおう雲のおかげで紫外線量が低く抑えられていることが、つくばのデータから最もよく分かる。

さて、日本には、なぜ、梅雨があるのだろうか？それには、ヒマラヤの役割が大きい。高度 5000m くらいを激しく流れているジェット気流が、ヒマラヤによって南北 2 つの流れに分けられるという。その南の

流れがつくるモンスーンが日本付近に達するからだ。南半球にはこんな高い山岳地帯がない。北半球にこそ存在するヒマラヤが、日本に 6、7 月の「梅雨」という雨期をもたらし、夏至という、紫外線が 1 年中で最もつよい時期に、日本人の皮膚ガンを減じさせてくれている。

ところで、近年は気候変動を身近に感じざるを得なくなってきた。ゲリラ豪雨がその 1 例だ。気候変動の別の側面に、カラ梅雨の可能性が語られている。梅雨といえば、じめじめとした雨模様の日々が長く続く、というイメージだが、それが変わるかもしれないという。ゲリラ豪雨とカラの晴れが頻繁に入れ替わり、不安定で予測が難しそうだ。6、7 月に晴れると強烈な紫外線が怖い。日本人がこれまであまり見ないで済んできた、紫外線だらけの太陽・・・それはどんな顔をしているのだろう。皮膚がちくちくと痛むのだろうか？中川は、見たくない、とつくづく思う。末期には暴れ梅雨が顔を見せはするものの、梅雨の山は、しとしとと雨が降り、水を蓄え、植物をはぐくむ。そんな日本の季節、日本の山であり続けてほしい。ありがとう、梅雨、ありがとう、ヒマラヤ。

[文献 1] <http://www.env.go.jp/chemi/kenkou.html> から「環境省 紫外線環境保健マニュアル 2015」]



(気象庁データ(1997～2014年平均値)より作成)

<図1-9 月別紫外線照射量(kJ/m²/日)>